

## 資料 7 : 現状の整理

### 1. 社会状況の現状整理からの考察

#### (1) 人口減少の進行

本町の人口減少が進行している。その主な要因は少子高齢化であることから、特に小さな集落では人の数が疎らになっていくことにつながり、家族内や隣近所の助け合いの維持が困難になることや、集落運営の担い手不足といった課題に直面することが想定される。

- ・ 周辺部の集落では、近所の車に頼った買い物などのおでかけや人のつながりで支え合ってきた集落運営の仕組み崩壊の危機。
- ・ 人口減少による各種サービスの縮小や撤退の可能性。

#### (2) 通勤・通学の範囲が広範

通勤及び通学の流動より、通勤での流入が流出を上回っているが、通学では流出が流入を大きく上回っている。通学の流出は主に高知市や須崎市に出ている。

- ・ 平成 27 年の町内における J R の定期券利用者数は 185 名であり、町外に通学している学生数より少ない。
- ・ 多くの交流人口を抱えているものの、鉄道、路線バスの利用にはつながっていない。

#### (3) 生活維持のために中心部への移動が必要

窪川地区、大正地区、十和地区ともに、中心部に病院や診療所、量販店が立地しており、各地区の中心部に移動することが必要となっている。

- ・ 集落によっては、通院や通学に 40 分以上の移動が必要な場所も存在。
- ・ 規模の小さな商店が営業している例もあるが、品揃えには限りあり。

#### (4) 公共交通以外の生活を支える移動サービス

移動販売や通院バスといった公共交通以外の生活を支えるサービスが提供されているが、現状では民間事業者間の顧客固定化の競争、限られた地区のみが利用対象であるなど、全ての町民がサービスを享受できる状況とはなっていない。

## 2. 移動手段の現状からの考察

### (1) 今なお公共交通が利用しづらい集落が存在している

多くの集落については、路線バスやコミュニティバスによる公共交通（乗合輸送）が運行しているものの、今なお公共交通を利用しづらい地区も残っている。

- ・バスを利用できる範囲内であっても、川を挟んでいたり高低差があったりするなど、地形による制約を受ける集落（家屋）の検証が必要。
- ・大正の田野々地区では、中心部内を巡回する移動手段が強く求められている。

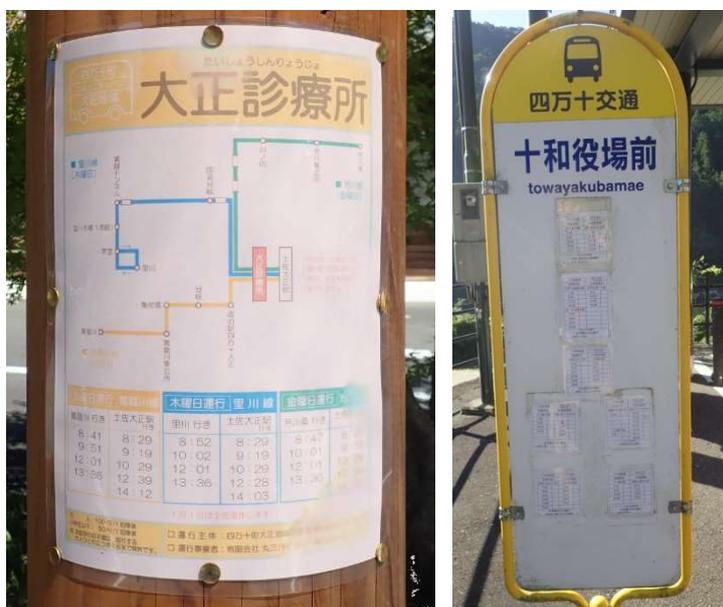
### (2) 路線バスの配置及び運行ダイヤが利用者の希望と整合しているのか

窪川駅と各地をつなぐ路線や大正駅と大正地区北部をつなぐ路線には、異なる系統を運行する便がある。それぞれが地区の事情を反映していることは理解できるが、現在でも同じ状況であるか検証が必要である。また、1日の運行回数が3.0回程度であっても、通学を考慮した運行ダイヤで運行していることや、学校休日に運休する路線が混在しているなどの理由から、特に高齢者にとって分かりづらいダイヤになっていることが明らかになった。これらの理由により、利用したくても利用できていない住民が存在することが考えられるため検証が必要である。

- 窪川駅－松葉川：滝本経由（0.5回）、米奥経由（5.5回）
- 窪川駅－影野：香月ヶ丘経由（2.0回）、大井野経由（1.0回）
- 窪川駅－興津：仁井田経由（2.5回）、見付経由（1.5回）
- 大正駅－森ヶ内：江師経由（2.0回）、江師非経由（1.0回）
- 大正駅－大奈路：江師経由（0.5回）、江師非経由（0.5回）

### (3) 路線バス及びコミュニティバスの情報発信

路線バスについて、地図にプロットされた路線図を使った情報発信がされていないため、特に土地勘の無い利用者にとっては分かりづらくなっていることが予想される。また、一部の停留所における情報掲示には工夫が求められる状況となっている。



#### (4) WEBを通じた情報発信

WEBを通じた情報発信はJR四国、四万十交通、役場が行っている。現場で利用できる情報ツールであるスマートフォン対応が完了しているのはJR四国のみとなっている。

四万十交通のホームページでは、掲載されている路線図や時刻表が運行実態と合っていない。また、タクシーも含めた町内の公共交通網に関する情報がワンストップで入手できるサイトが存在していないため、来訪者に対する情報発信としては脆弱である。

#### (5) 公共交通網を構成する乗り物同士の接続が出来ていない

路線バスと路線バス、路線バスと鉄道、鉄道と鉄道など、公共交通網を構成する乗り物同士のダイヤ接続が出来ていないため、利用者は長い待ち時間を要したり、利用そのものをあきらめたりする傾向にある。

- ・路線バスが通学ダイヤを意識して運行しているため、午前の早い便が8時前後に窪川駅に到着するが、高知方面への列車の利用には長い待ち時間が必要となる。

**例：窪川駅に路線バスで志和（8:00着）、興津（8:03着）方面から移動。高知方面行きの列車（普通9:07、特急10:04）を利用するためには待たなければならない。**

- ・土佐大正駅に下津井方面及び森ヶ内方面からバスが8時頃到着するが、予土線の窪川行き列車は7:42に出発しているため、利用できない。同様に窪川行き路線バスも9:25まで待たなければならない状況となっている。

#### (6) コミュニティバスに対する不満と期待

本町では、町内の公共交通空白地区や著しく利用の少ない路線バスを休止し、曜日を限定するものの運行ダイヤについては利用者の希望に可能な限り合わせるコミュニティバスを配置する取り組みを行ってきた。多くの利用者から好評を得ているものの、特に車利用から公共交通利用に切り替えようとしている人から曜日を限定した運行に対する不満が出されている。

一方で、現状の路線バスが利用しづらい地区からは、曜日限定であってもコミュニティバス化を期待する要望も出されている。

- ・コミュニティバスの新たな運行、もしくは路線バスからの置き換えを期待されている地区  
窪川地区：志和峰地区、黒石地区南部、興津地区  
大正地区：中打井川地区、奥打井川地区、下道地区  
十和地区：小野地区、八木地区

#### (7) タクシーが利用できない日が発生している

窪川地区においては、地元のタクシー会社 3 社が営業しているが、3 社が同じ日に定休日となる時があり、タクシーが利用できない日（日曜日）が発生している。急な外出に利用できない不安と不満を抱えた町民から意見を出されている。

一方でタクシーの営業所がなくなった大正地区では、住民からタクシーが自由に使えなくなったことで不安を感じている意見が寄せられている。

#### (8) 通院バスと路線バスが一部区間で並んで走行している

例として、くぼかわ病院の志和行き通院バス（水曜・土曜運行）が 13:10 にくぼかわ病院を出発するが、13:05 に四万十交通の路線バス志和行きが窪川駅を出発するため、ほぼ同じ時間に同じ方向に向かって運行することとなっている。

#### (9) スクールバスの運行に対する期待と要望

子どもが通学している保護者からの要望として、スクールバスの運行を希望する意見が多く出されている。

- ・クラブ活動に路線バスを利用しづらいため。
- ・路線バスの興津線は、一定の雨量がある場合運休となるため通学できなくなるため。
- ・アンケート結果より、自転車通学者は荒天時には保護者の送迎に頼る例が多い。
- ・自転車通学者の通行環境（道路が凸凹している。街灯が少なく暗い。など）に不安を抱いている保護者が多い。

#### (10) 路線バス、コミュニティバスともに待ち時間の過ごし方

十川地区中心部と大正地区中心部において、病院や買い物などの用事を済ませた後、特に寒い日や暑い日、雨の日などに帰り便を快適に待てる場所が無い。その時間の過ごし方に苦痛を感じているという意見が出されている。

#### (11) 鉄道駅からの二次交通が脆弱

J R 予土線を通勤や通学に使おうとしても、十川駅や土佐大正駅、土佐昭和駅などと自宅をつなぐ二次交通が脆弱であるため、利用につながっていない状況がある。

## (12) 鉄道駅の階段に対する不満

窪川駅、打井川駅、十川駅のホームに至る階段について、特に高齢者から不満の意見が数多く出されている。鉄道利用に対する大きな障害になっていることがうかがえる。



十川駅



打井川駅

## (13) 公共交通（乗合輸送）では移動しづらい高齢者が増加している

これまでは、路線バスやコミュニティバスなどの乗合輸送を利用できていた高齢者が、身体の衰えのため時間を合わせて不特定多数の人が利用する乗合輸送を利用出来なくなっている事例が散見されるようになった。

同様に車いすで利用できる移動手段を探す高齢者も見られる。



大正地区中心部

### 3. 町民の意識に関する考察

#### (1) 町内の公共交通に関する正しい情報が行き渡っていない可能性がある

町内の公共交通網について正確な情報を得ていない人が存在している。例として、「コミュニティバスは対象とする地区以外の人には利用してはいけないものだ」、「路線バスは利用者が少ないので、小さな車両に替えて経費削減につなげたらいい」などという意見が挙げられる。

実際に地区別意見交換会においても同様の意見及び提案が出された。

#### (2) 車及び運転免許証を手放すことに躊躇する高齢者が多い

車を使っている人が車もしくは運転免許証を手放すと、生活を支える移動手段を失うことに直結すると考えている高齢者が多くいる。

住まいの地区に少なくともコミュニティバスが運行していても、同様に不安を感じて踏み切れないようである。

#### (3) 将来の移動手段確保について不安を抱く町民が存在している

アンケート調査結果より、回答者の約 1/4 は 5 年以内に現状の車利用が難しくなる不安を抱いていることが明らかになった。

その対策については、「家族や友人などの運転に頼る」、「公共交通を利用する」、「タクシーを利用する」といった案が多くなっている一方で、「良い対策がなく、困っている」と回答した人が 107 人（複数回答可）となっている。

車の利用には不安を持っているが、車を手放すと生活に必要な移動手段確保に困難を来すこととなり、生活の質そのものが低下することを不安視し、結局はそのまま車を利用し続けることにつながっている。